

目次

1. [サマリー](#)
2. [背景](#)
3. [現状](#)
4. [今後の展望](#)
5. [参照記事一覧](#)
6. [アーティスト紹介](#)

1. サマリー



Alex Dolores Salernoの2024年の作品“Fortress Gate (Gemütlichkeit)(要塞門(居心地いい(ドイツ語)))”
[Artists With Disabilities Show Us How We've Failed](#)

感じたこと

アメリカは、イギリス同様障がい者の権利運動が1970年代から起こり、障がい者アート発祥の国でもあるが、イギリスとは大きく異なる姿をみせている。その理由として、存在する権利運動の種類が多さや政治的影響が挙げられる。現状、障がいを持つアーティストは何かしらの組織に属することなく個人で活動するケースが多いように思われた。また、障がい者の正義運動と関連付け、特に自身の障がいに関係した作品を制作し、状況の変化を訴えているケースが多いため、彼らが”障がい”以外のテーマで作品を制作することが妨げられているようにも思えた。彼らの作品のためか、健常者で彼らを支援する人びとにも彼らとの認識のズレが生じているようにも思われた。

障がいを持つアーティストが集団ではなく単独で活躍/闘っているためか、アーティスト個人に対する評価は高くても、それがアート界や社会の変化に

つながっているようにはみられず、政治的・法的影響を強く受けるため、状況改善どころか2025年時点ではむしろ状況は厳しくなっているようである

背景

アメリカでも1970年代～1980年代の障がい者の権利運動が起きたが、歴史的に障がいに対して否定的な考えが浸透しており、他の様々な事柄に関する運動も盛んなことから、障がい者に焦点が当てられにくいようである

- ドイツはナチス政権下での行いの反省から障がいを持つ人に対する対応を改めたが、ナチス政権はアメリカの行動を手本としており、その当時に成立した法律が今も有効であるものも存在する。
- (アメリカでは歴史的に)障がいを持つ人の多くが、障がい者と特定させることを恥じるべきという考えを持って育ち、自身の異なりを隠すよう推奨されていた。
- "障がい"は権利運動のテーマの1つに過ぎず、障がいの人種・ジェンダー・社会経済的地位・他のあらゆる区分と交差する性質により、白人至上主義制度下で個人への抑圧が議論の中で埋もれることは多い。

上記のような状況は、アート界でもみられるという

- 歴史家から障がい者が大幅に無視されてきた理由の1つに、多くのアーティストが自身の身体的・精神的支障を創造力の強化ではなく阻害要因と考え、自身に"障がい"という特徴づけをする/されるのを避けていたことが挙げられるという。ある芸術史家で障がい者アート運動を専門とする人物は「芸術史は私たちの周りの障がいを持つ人びとの歴史でもありますが、そのようには認識されていません」、と述べた。

今回の調査で重要な歴史的な出来事は、障がい者の権利運動の中で起きた障がい者の正義運動と、その結果として1991年に施行された障がいを持つアメリカ人保護法(A.D.A.)であるようである

- 障がいを持つアーティストのアートの露出度の高まりは、A.D.A.施行以前まで障がいを持つ人びとの多くが通常、施設に入所させられ施設外の世界から切り離されていたという事実による可能性がある。
- A.D.A.施行後に現れたアーティストは、障がい者を創造の妨げではなく推進力とみなしており、その中の3名の有色人種で障がいを持つアーティスト兼活動家が、2005年に“障がい者の正義”という用語を創り、健全者優先主義との闘いを、人種差別・性差別・同性愛嫌悪に対する闘いと分けて考えられない“抑圧が交差する点”として捉えていた。彼らは、個人の価値は“資本主義文化が期待する生産性の程度”と結びつけられるべきではない、と論じた。これは、政治的な意思が強いように思われた。

- アメリカ全土の障がい者の正義運動の展開で、アートは1つの必須の、最重要でさえあるかもしれない、役割を果たしている。障がいを持つアーティストが人生/在り方について極めて多様な見解を何度も何度も共有している。それらの作品は、障がいを持つ人びとを抑圧させる健常者優先主義の考えを粘り強さを備えて徐々に弱体化させており、私たちには文化的な波の方向の変化としての効果の兆しが見え始めている。

ただし、障がい者アートが生まれたとされるイギリスとアメリカは大きな違いを示しており、アメリカは政策や法律等、トップダウンの体制が強く、特に**2025年1月以降のTrump政権**下で、その傾向が強化されているように思われる。そのためか、アーティストにとっても政策・法律の存在が重要な意味を持っているように見える

- (A.D.A.施行以前から活動していたある聴覚障がいを持つアーティストは、)A.D.A.が保障する社会的変化が進んでいることを踏まえ、自身の障がいに関する作品はすぐに過去のものと感じられるのだろうと考えていた。だが、今日の広範な文化部門では未だ、障がいは隠され/修正されるべきものとみなされている。彼らはA.D.A.により状況が変わると信じ、運動を起こす必要が自然になくなると考えたが、そうはならなかった。そのため、障がいを持つアーティストは現在新たな動きをみせているようである
- (障がいを持たないアーティストである執筆者は、)歴史を振り返ると、自身が無意識に、障がいを持つ人びとの声を歴史的に・現在でさえ抑圧している支配的な文化の代弁者であった可能性が極めて高いという: 例えば、1993年のある年次調査結果を見ると、新たな美学(障がいを持つアーティストの作品から読み取れる美学)が発現し始め、批評家はそれを見過ごしていた。
- ある障がいを持つアーティストは「皆が自身に起こり得る最悪の事態と考えるのは、動けなくなったり病気になるとかですが、実際には、アメリカでは...最悪の事態とは、肉体労働のために搾取できない身体を持つようになった場合に生きられない制度への誘導です」、と述べた。

現状

障がいを持つアーティストの現状としては以下が指摘できる

- A.D.A.施行後に障がいを持つアーティストが注目され始めたが、イギリスとの大きな違いとして、アーティストはあくまで個人として活動しており、障がいを持つアーティスト同士がつながる組織がほとんどないことが挙げられる。(ある参照記事によると)アーティストと活動家は、数の多さに名を挙げることができない程の障がいを持つ前人たちが開拓した道を辿り、数多くの連合が形成された。(だがその”連合としての組織”は今回の調査では、ほとんど確認できなかった)アート

を主要な武器とし、彼らは健常者優先主義の規範で穴ができていた文化に、彼らの物語や意見を浸透させ、変革させることを求めた。

- 健常者優先主義への挑戦を意図した作品制作をアーティストは主に3つの形で行っているという:
 - a. 1つ目は、当事者としての経験を語るものであり、それを行うアーティストの作品は、障がいを持つ鑑賞者にとって最も明示的であり歓迎され、認識されたと感じることができる作品であり、健常者の鑑賞者にとっては考えたことのないものの見方へと導くきっかけとなり得る。(これが一番多いように思われ、そのためアーティスト同士のつながりは生じない)
 - b. 2つ目は、アーティストによる、様々な形の利用可能性のモードの構築・試み・提唱の実施が挙げられる。何かが万人向けになり得るという考えや、絶対に”正しい”一連の規則の遵守が利用/体験/活動可能性を実現させるという考えを誤りとし、障がいを持つ人のための配慮措置の中心に創造的適応力を据える精神を育成している。
 - c. 3つ目は、アーティストが障がいを欠陥や不全と考える必要がない、支障が創造的に生成的な力になり得ることを示す形であり、(その考えの下では)支障は、私たちに様々な規範について再考させている。

つまり、障がいを持つアーティストが障がい以外を作品のテーマにする可能性が低い状況であり続けている

2025年1月以降のTrump政権下ではアートだけでなく、障がいを持つ人の生活の質の保証や発展可能性の剥奪の脅威が認められ、受け身でいるだけでは決して明るい未来が想定できないようである

- ホワイトハウスのウェブサイト上から障がいを持つ人向けのページと手話による説明が完全に削除され、ホワイトハウスを含む複数の連邦政府機関から通訳者が消え、それらの(障がい等により特別なニーズを持つ人のための)配慮部門は、Trumpの反DEIA令により解体された。
- “多様性”や“女性”同様に、“利用可能性”や“障がい”という言葉も米国立科学財団の助成金への申請に対し、問題視や却下の理由に挙げられるようになった。
- Trumpは教育省の解体を命ずる大統領令に署名し、同月上旬、教育長官は同省の職員1,300名超を解雇し、7つの地域事務所を閉鎖させ、その中には多くの公民権事務所・特別教育事務所の一部・リハビリテーションサービス事務所も含まれていた。同省は、早期(教育)介入策・高校卒業後移行プログラム・American Printing House for the Blind等の組織・パラリンピックへ資金提供し、障がいを持つ個人の教育法(障がいを持つ子どもの“無償で適切な公的教育”を享受する権利を保証する法律)の施行を行っている。各子どものニーズと

サービスは個別教育プログラムの1つとして知られる法的同意の下で記録され、各種療法の提供の提供と特化した科目内容が採用される。それらのプログラムなしでは、障がいを持つ生徒は教室にいても有意義に教育を受けられないだろう。現在、特別教育事務所責任者の役職には誰も就いていない。

今後の展望

今後も継続的な障がい者の正義運動(利用可能性のための運動)が必要であり続けることを強調しながら同時に、アート界の健常者が態度・考え方を変える必要性が認識されていることが判明した

- 障がいを持つアーティストは、彼らの仲間が作品を見れるようにするため、美術館の利用可能性に対する最も熱心で重要な提唱者であり続けている。例として、2019年に複数の障がいを持つアーティストがある集団を結成した。その集団は、障がいを持つ人びとによる障がいを持つ人びとのためのパフォーマンスや集会を開き、常にASL通訳者・絵画の文章での描写・スロープ等、様々な形式の利用可能性を検討しており、主要なメンバーによると、同集団が単につながりの手段ではなく、実際にそのメンバーの2023年のパフォーマンス作品“は、アートの体験可能性自体が原材料・アート形式となっていることが示されていた。
- (障がいを持つアーティスト対象の滞在型プログラムの参加者の作品を展示した展示会に訪れた健常者の執筆者は、)アーティストを障がいという枠組みでグループ化するのは、余りに健常者優先主義的な展示プログラムに挑む極僅かなアーティストを取り上げて、健常者優先主義であるという批判を回避しようと試みる形式主義を示す機関が存在する状況に対する、明らかに必要な是正を示していた。だが、私たちは同滞在型プログラムのような機会によって解決することはできない。それらのアーティストがアート界の広範に散らばり・広がっていき、彼らの作品が必ずしも障がいをテーマにしなくてもいいようになることを望む。
- アート界において、健常者優先主義と利用/体験/活動可能性の欠如が驚くべきものとみなされたことは1度もないが、望ましくない事例の批判より、障がいを持つアーティスト皆が作品の中で行っている行為の大多数が健常者優先主義的な解釈を批判するのではなく新たな解釈を創り出していることに対する称賛に注力すべきではないだろうか。2022年までで速度は遅いものの、確実な利用/体験/活動可能性の向上が認められている。
→だが、どこか障がいを持つ人は未だ頻繁に憐れみの対象とされている。多くの人自身が共有していない経験やアイデンティティの代理として発言・意思決定することは有害であり得ると考える一方、障がいを持つ人は依然、時に彼らの味方になろうとする人びとから、自身で意思決定ができないと誤って解釈されている。

2. 背景



(1977年4月22日にアメリカ合衆国保健福祉省の長官官房が位置する建物の入口で、座り込み抗議を行う障がい者の権利運動の活動家たちの写真)

[The US right is coming for disabled people. Here's why that threatens everyone](#)

ドイツはナチス政権下での行いの反省から、第二次世界大戦後の障がいを持つ人に対する対応を改めたが、ナチス政権はアメリカの行動を手本としていた

- [...]アメリカは、障がいを持つ人の排除の歴史を持つ。人類は“望ましい特徴”を持つ子孫を生み出すべきであり、望ましくない特徴は滅すべきとする、疑似科学的な考えである優生学は、19世紀後半アメリカのみならず世界的に人気となった。[...]世界で最初に優生学に基づく法律はアメリカで成立した。

その当時に成立した法律が今も有効であり、従って障がいを持つ人の就労環境も劣悪であるように見える

- アメリカの連邦最高裁判所が1927年にバージニア州で下した強制断種を支持する判断が覆されたことはない。障がいを持つ人に強制断種を施すことは少なくとも31州とワシントンD.C.で合法であるままである。
- 障がいを持つ人に州毎の最低賃金額以下の金額を彼らの労働に対し支払うことも合法とされている: アメリカ合衆国労働省から”授産所としての運営の認可を受けた事業主は、障がいを持つ従業員に対し、法的最低賃金を遥かに下回る、平均時給3.34ドルを支給している。

アメリカが”人種のサラダボウル”と比喻されるように”障がい”も権利運動のテーマの1つに過ぎず、そのため特に注目視されてはいないとの指摘もみられた

- 障がいの人種・ジェンダー・社会経済的地位・他のあらゆる区分と交差する性質により、白人至上主義制度下で個人への抑圧が議論の中で埋もれることは多い。

しかし、障がい者アートはイギリスとアメリカの障がい者の権利運動から生まれたことから、障がい者の権利運動は重要な意味があったようにみられる

- (アメリカでは歴史的に)障がいを持つ人の多くが、障がい者と特定させることを恥じるべきという考えを持って育ち、自身の異なりを隠すよう推奨されていた。
- 歴史家から障がい者が大幅に無視されてきた理由の1つとして、アーティストの多くが自身の身体的・精神的支障を創造力の強化ではなく阻害要因と考え、自身に”障がい”という特徴づけをする/されるのを避けていたことが挙げられる。芸術史家で障がい者アート運動を専門とするAmanda Cachiaは「芸術史は私たちの周りの障がいを持つ人びとの歴史でもありますが、そのようには認識されていません」、と述べた。
- 1970年代～1980年代の障がい者の権利運動の中で起きた障がい者の正義運動で生まれ、(1991年に施行された)障がいを持つアメリカ人保護法(A.D.A.)後に現れたアーティストは、障がい創造の妨げではなく推進力とみなしている。[...] (その中で3名のアーティストは)2005年に“障がい者の正義”という用語を創った有色人種の障がいを持つ活動家であり、健常者優先主義との闘いを、人種差別・性差別・同性愛嫌悪に対する闘いと分けて考えられない“抑圧が交差する点”として捉えていた。彼らは、個人の価値は“資本主義文化が期待する生産性の程度”と結びつけられるべきではない、と論じた。今回参照した記事からは、1970年代～1980年代の障がい者の権利運動の影響に関する言及がみられず、A.D.A.施行の影響に言及がされていた。

ただし、障がい者アートが生まれたとされるイギリスとアメリカは大きな違いを示している。政治的観点においてアメリカはイギリスに比べ政策や法律等のトップダウンの力が強く、特に**2025年1月以降のTrump政権**では大統領令の発令など、その傾向が強化されているように思われる。そのためか、アーティストにとっても政策・法律の存在が重要な意味を持っているように見える

- (A.D.A.施行以前から活動していた聴覚障がいを持つアーティストのJoseph Grigelyは、)A.D.A.が保障する社会的変化が進んでいることを踏まえ「“Postcards to Sophie Calle”(彼の障がいに関する作品)はすぐに過去のものと感じられるのだろう」と考えていた。だが、彼は間違っていた: 今日の広範な文化部門では未だ、障がいは隠され/修正されるべきものとみなされている。彼はA.D.A.により状況が変わると信じ、運動を起こす必要が自然になくなると考えた。だが、そうはならず、アート界もそうであったことを他の参照記事でも確認ができた。
- (障がいを持たないアーティストである執筆者は、)私は無意識に、障がいを持つ人びとの声を歴史的に・現在でさえ抑圧している支配的な文化の代弁者であったのだろうか。残念ながら歴史は、その可能性が極めて高いことを示している。例えば、1993年のWhitney Biennialの年次調査結果を見ると、新たな美学(障がいを持つアーティストの作品から読み取れる美学)が発現し始め、批評家はそれを見過ごしていた。
- アーティストのEmily Barkerは、「皆が自身に起こり得る最悪の事態と考えるのは、動けなくなったり病気になるとかですが、実際には、アメリカでは...最悪の事態とは、肉体労働のために搾取できない身体を持つようになった場合に生きられない制度への誘導です」、と述べた。
- 障がいを持つアーティストのアートの露出度の高まりは、1980年代まで(つまりA.D.A.施行以前)障がいを持つ人びとの多くが通常、施設に入所せられ施設外の世界から切り離されていたという事実による可能性がある。

だが同時に、**2005年からの障がい者の正義運動の好ましい影響も**みられる

- 過去10年間のアメリカ全土の障がい者の正義運動の展開において、アートは1つの必須の、最重要でさえあるかもしれない、役割を果たしている。[...]、障がいを持つアーティストが人生/在り方について極めて多様な見解を何度も何度も共有している。それらの作品は、障がいを持つ人びとを抑圧させる健常者優先主義の考えを粘り強さを備えて徐々に弱体化させており、私たちには文化的な波の方向の変化としての効果の兆しが見え始めている。

2025年1月以降のTrump政権下ではアートだけでなく、障がいを持つ人の生活の質の保証や発展可能性の剥奪の脅威が認められ、受け身でいるだけでは決して明るい未来が想定できないようである

- ホワイトハウスのウェブサイト上から障がいを持つ人向けのページとASLのコンテンツが完全に削除され、ホワイトハウスや複数の連邦政府機関から通訳者の存在がなくなり、それらの(障がい等により特別なニーズを持つ人のための)配慮部門は、Trumpの反DEIA令により解体された。
- “多様性”や“女性”同様に、“利用可能性”や“障がい”という言葉も米国立科学財団の助成金への申請に対し、問題視や却下の理由に挙げられるようになり、他の連邦政府機関・調査機関で懸念が生じている。
- 障がいを持つ子どもの教育を享受する権利も攻撃を受けている。2025年3月20日、Trumpはアメリカ合衆国教育省の解体を命ずる大統領令に署名した。同月上旬、教育長官は同省の職員の半数近くである1,300名超を解雇し、7つの地域事務所を閉鎖させ、その中には彼女はかつて影響を及ぼせないと発言していた、同省の公民権事務所の多く・特別教育事務所の一部・リハビリテーションサービス事務所も含まれていた。[...]同省は、早期(教育)介入策・高校卒業後移行プログラム・American Printing House for the Blind等の組織・パラリンピックへ資金提供している。同省はまた、障がいを持つ子どもの“無償で適切な公的教育”を享受する権利を保証する法律である、障がいを持つ個人の教育法の施行を行っている。各子どものニーズとサービスは個別教育プログラムの1つとして知られる法的同意の下で記録され、各種療法の提供の提供と特化した科目内容が採用される。選択型字幕・ASL通訳者・スロープと車いす利用者用のエレベーターのボタン・点字資料・優先席・オーディオブック・ノートパソコンまたは文字起こし機の使用・動くための小休止等が配慮措置として含まれる。[...]それらなしでは、障がいを持つ生徒は教室にいても有意義に教育を受けられないだろう。現在、特別教育事務所責任者の役職には誰も就いていない。

3. 現状



[United States Artists was created in 2006 to support artists and their essential role in society.](#)

A.D.A.施行後に障がいを持つアーティストが注目され始めたが、イギリスとの大きな違いとして、アーティストはあくまで個人として活動しており、障がいを持つアーティスト同士がつながる組織がほとんどないことが挙げられる

- アート界の自身の中の健常者優先主義の認知速度は遅いが、今日アート関連機関は障がいを持つアーティストの作品に少し深い考察を持って関与している。2025年2月、Whitney Biennialは、ドイツ・ベルリンを拠点に活動する44歳のアメリカ人アーティストで、出生時から聴覚障がいを持ち、音が完全に失われた演劇が称賛を受けているように見える滑稽な絵画作品等の

作品を制作し、音がいかに“社会的通貨”として機能しているかについて探究している、Christine Sun Kimのこれまでの作品を複数階を使って展示した。

- アーティストと活動家は、数の多さに名を挙げることができない程の障がいを持つ前人たちが開拓した道を辿り、数多くの連合が形成された。アートを主要な武器とし、彼らは健常者優先主義の規範で穴ができていく文化に、彼らの物語や意見を浸透させ、変革させることを求めた。

上記2つから、健常者優先主義への挑戦が障がいを持つアーティストにとって大きなテーマ/目標になっていることがわかる

健常者優先主義への挑戦を意図した作品制作をアーティストは主に3つの形で行っているという

1つ目は、当事者としての経験を語るものであり、それを行うアーティストの作品は、障がいを持つ鑑賞者にとって最も明示的であり歓迎され、認識されたと感じるができる作品であり、健常者の鑑賞者にとっては考えたことのないものの見方へと導ききっかけとなり得る。(これが1番多いように思われ、そのためアーティスト同士のつながりは生じない)

- Emily Barkerの2019年のインスタレーション作品“Kitchen(台所)”は、青白いポリメチルペンテンでできたL型のキッチンカウンターと飾り棚である。Barkerはキッチンカウンターを展示室に設置し、天井から飾り棚を吊るして、車いすを利用する人の大多数が台所で経験することを再現した: 飾り棚は全く手が届かず、カウンターも手を切ることが心配せずに野菜を切るには高過ぎる。Barkerが、“私が日々毎日経験することと描写した再考の経験は、混乱させ・子ども扱いされたように感じさせ・苛立ちを感じさせるものであった。
- Pelenakeke Brownの2024年のデジタル画作品“did you make it to the studio today?(今日はスタジオに行けたか)”では、反芻思考行動のように、“今日はスタジオに行けたか? いえ、はい! いえ、いえ...”という文章が作品内を蛇行し続けている。(執筆者は)「もし(あなたが)“アーティスト”を単純に“アートを創る人”と定義しているならば、“今日は何か制作したか”は、私たち自身の持つその定義の中核に切り込む、繰り返されるフレーズである。世界が自身に適したように構築されておらず、自身の能力の発揮に困難が伴うことは、極めて動揺されられることは理解に難くない」、という見解を示している。
- (執筆者は)「私たちの社会は長い間、障がいを持つ当事者による語り不足しており、自叙的作品が異様に注目を浴びるのも、驚くべきことではない」、と指摘している: Christine Sun Kimが2019年に作成した、円グラフ集の1つ “なぜ耳が聴こえる両親が手話を使うのか”のグラフの構成要素には、“私が愛されていると感ぜられるようにするため”や“(両親)が私と顔を合わせているときに会話をするため”が含まれ、また別の円グラフの1つ “耳が聴こえる嫌な奴らが私に言う”に関

する円グラフの構成要素には、“神様に祈って、彼が君の耳が聴こえるようにしてくれるだろう!”や“私の隣人の犬は耳が聴こえない、君たちは会うべきだ!”が含まれていた。誰かの日々の生活の描写のように、円グラフはそれぞれの瞬間を捉えていた。彼女は、聴覚障がいを持つ鑑賞者とそうでない鑑賞者の両方に話しかける作品の制作を心掛けており、それは、障がいを持つ多くの人が経験する、期待度の低さを思い起こさせるものであり[...]】。

- 聴覚障がいを持つAlison O’Daniellは「耳が聴こえる人は“音について聴覚障がいや難聴を持つ人が強いられるように真剣に想像力を持って考えたことがほとんどない」、と述べた。その点を指摘するため、彼女は現地の聴覚障がいを持つ人びとを招き、彼らがそこで経験した、音の移動と消失の多様な形を表現することを試みた。そして、色とりどりで不快な混合した音を生む素材のカーペットに彼らの経験の多様な形を表現し、その芸術用施設訪問者に聴覚への集中の共有へと導いた。
- 多様性を含む集団から自叙伝に基づく見解の提示は、今日のアート界において見過ごされてきた個人・集団が採る主な手法であるようにみなされる場合が多い。だが、アーティストは障がいを持つ人びと全体ではなく特定の障がいを持つ人びとの経験について訴えていることを指摘している点に留意することは、重要ではないだろうか。また、誰もが突然または年齢を重ねるとともに永久的/一時的な障がいを持つ可能性があるため、他の要素よりも障がい個人のアイデンティティに与える影響(占める)には個人差があることも留意すべきかもしれない。だがそれは、障がいを持つ可能性のある人びと全員が障がい者の正義の支持したり彼ら全員の経験が考慮されることを意味してはいない。(つまり、個人の問題として留まってしまう恐れがある)

2つ目は、アーティストによる、様々な形の利用可能性のモードの構築・試み・提唱の実施が挙げられる。何かが万人向けになり得るという考えや、絶対的に”正しい”一連の規則の遵守が利用/体験/活動可能性を実現させるという考えを誤りとし、障がいを持つ人のための配慮措置の中心に創造的適応力を据える精神を育成している。

- Christine Sun KimとPark McArthurは、日々の配慮とケアの行為/措置に焦点を当て、興味を持つまたは今まで(障がいについて)考えたことのなかった鑑賞者に障がいを持つ人びとの日々の生活に関し気づきを与えつつ、障がいを持つ鑑賞者がアーティストと自身が共通点を持つと感じられる作品を制作している。2人のアーティストは共に、障がいを持つ人びとの日々の経験と、鑑賞者が利用/体験/活動可能性に初めて出会ったときに採ることが避けられない、詮索的で恩着せがましい健常者優先主義の対応の両方を併せて示すことの重要性に対応している。
- (執筆者によると)Park McArthur・Constantina Zavitsanos・Lazard・Hermanの動画と文章に基づく一連の作品集“...のための作品集”

は、自身やお互いのために日課として行う個別に調整されたケアについて語るものであるという。それらの作品は共に、均一化された対応方法と障がいに対する考慮を欠き同一視する概念に反発するものである。彼女たちの動画は、クロスディスアビリティというグループからの重要な学びの1つを思い出させた。私たちは皆異なるため、誰もあらゆる人の利用/体験/活動可能性に対するニーズを想定できない。それは、確認を取り・常に意見を聞く姿勢を保ち・柔軟であり続け・自身の身体や脆弱な点について不快なく相手が語れることが重要であることを意味している。クロスディスアビリティという結束は、私たちの個々人で異なり時に相容れない利用/体験/活動可能性に対するニーズについて話し合う場の創出を含むものである。障がいを持つ人びとに関する誤った/過度に拡大した一般論は結局のところ、個人の身体的障がいと認知能力の組み合わせまたは、個人の障がいを”克服”されなければいけない”悲劇”とみなす、健常者優先主義の考えの根元に存在するのだ。

- 障がいを持つアーティストの多くが、柔軟な精神を利用可能性の中心に据えたモードとなる作品を制作している。それらの作品は人びとの注意を穏やかまたは大胆に、構造的利用可能性の欠如に向けさせることが多い。彼らは時に挑発にもなり得る解決策を提示し、時に Amalle Dublon の言葉を引用し、利用可能性を彼らの”最重要要素”として扱っている。例えば、Shannon Finnegan は美術館の展示会場に腰を下ろす場がないことを鑑賞者に深く考えさせる、腰掛けを用いた作品を通して批判している。Finnegan の作品は、展示会毎に異なるが、通常クッション部分は青色で、そこにアーティスト自身の手書きによる白色のメッセージが書かれており、2018年制作の作品の1つのベンチには、”この展示会は余りに長時間私に立ち続けることを求めている。あなたもそう思うなら座って。”と書かれている。グループ展の場合、Finnegan は動画作品の目の前に設置し、鑑賞者を馬鹿げたように20分かそれ以上の間、立たせることもある。
- 大多数の利用可能性を作品の最重要要素としている作品は、視聴覚作品であり、それには2つの理由がある: 1. 音や画像による作品の方が建築作品のように硬く高額な造形作品より、アーティストが規範の変化を図るのに容易である; 2. インターネットが普及している現代で用いられている様々な(アート)形式を試すことで、あらゆるものへの利用/入手可能性に対する私たちが共有する責任に対する注意を向けさせることを促せるからである。
- (鑑賞を目的とした動画作品の)多くの鑑賞可能な動画には、聴覚障がいを持つ人や視覚障がいを持つ人のための字幕や音声による描写が利用できる設定がされており、それらは追加的でも後になって考え出されたものではなく、作品の必須構成要素とされて設けられている。
- Alex Dolores Salerno の2020年の作品”眠る神”は[...]会話の間にスペイン語の音声描写を入れるのではなく、Salerno はスペイン語の音声描写を会話の中に混ぜ込み、それに続いて英語とスペイン語で繰

り返され、“なぜ鑑賞を可能にさせるための対応による全体的な考え方の変革を許さず、それらの対応を制限された形式に当てはめられなければならないのか”、を黙示的に問うている。

- 上記の全てのアート作品は、鑑賞者をいたわり、障がいを持つ人への配慮は継続的な対話によるものであり[...]健全者優先主義の考えに対して向けられたものであり、同時に作品の材料もまた利用/鑑賞可能性の点から変化している。そして、利用/鑑賞可能性に関し、皆が責任を共有しているため、喫緊の問題への対応は明らかに対応されるべきである。加えて、それら作品は、形式を試してよりよい世界を思い描くことに焦点を当てることを得意とする、アートの強みを活用している。

3つ目は、アーティストが障がいを欠陥や不全と考える必要がない、支障が創造的に生成的な力になり得ることを示す形であり、(その考えの下では)支障は、私たちに様々な規範について再考させ、結果として新たな可能性が切り開かれることを求めるものとされている。

- (執筆者によると)歴史上、身体の機能上の支障は、支配的な規範の再考を私たちに求める創造的な力であったことは、障がいを持たない人びとに単に便利で有益な発明として忘れ去られている場合が多いとはいえ、それらは身体の機能上の支障がどれ程長く創造力の中心に存在しているかを示している。それらの創造力を歴史上の些末なことと位置づけられる、または、その成果を“一般的である”と片づけられることを拒否し、障がいを持つアーティストの多くが、自身の固有の身体と物事のやり方を積極的に称えている。
- (執筆者によると)上記で言及した姿勢が最も顕著に見られるのが障がいを持つダンサーの作品である。障がいを持つ人びとにより運営・披露する組織Kinetic Lightは、車いすを利用する人をバンジーコードで吊り下げ作品のために専用で作られたスロープへ着地させるといった、主要ダンサーの身体に合わせたダンスの動き創り出しているだけでなく、障がいを持つ鑑賞者を意図した作品も制作している。パフォーマンスには音声描写が伴い、その描写は感情表現豊かなものから無機質なものといったいくつかの選択肢が存在することが多く、鑑賞者が様々な語り方から音声描写を選択することができ、触覚による音の聴き方にもいくつかの選択肢がある。(同組織は)アメリカ建築家協会が自身に対応して調整だけでなく配慮や歓迎さえも行ってくれないと感じていたアーティストと作家の多くを結束させ、障がいを持つ人びとに作業過程と製品に関する全てを全面的に変えることを可能にした。
- (執筆者によると)視覚芸術でも身体の機能上の支障は創造の力になると称賛されている。その考えは、芸術史上で障がいを、印象派～Frida Kahloの(自身の障がいについて)訴える自画像までの時代に示されていた“悪しきもの”とする見方から、現代のアーティストが“明らかな政治的可能性”と結びつけさせるようにさせた。

- (執筆者によると)聴覚障がいを持つ多くのアーティストが、“聴覚喪失”という用語を“聴覚障がいの獲得”に変更するよう提唱活動を行っている。



(Shannon Finneganの2018年に制作された初期の作品の1つである、“この展示会は余りに長時間私に立ち続けることを求めている。あなたもそう思うなら座って。”、と書かれているベンチ)

[Nothing About Us Without Us: Disability Arts Now](#)

既存のアート界の大組織である**United States Artists**の中で、障がいを持つアーティストに関連するのは、組織の小さな1部門であるものの、マネージャーでアーティスト・教育者・学芸員である**Ezra Benus**適任者であるためか、活動は一定の充実さを持っているように思える

- アメリカ合衆国のアーティストは政策立案・政策提言を主に行なう研究機関であり、制約のない資金提供と個別の専門的支援の提供によりアーティストの幸福感を向上させ、彼らの作品を強化し、彼らの社会に不可欠な役割の支援状態の改善を行っている。
- 同機関のプロジェクトの1つ、Disability Futuresは、アメリカのアート・動画・ジャーナリズム部門を含む文化の姿を発展させた作品を制作する障がいを持つアーティストを支援するもので、2020年以降60名の障がいを持つアーティストに一律5万ドルの資金支給と技術的支援を行っている。
- Ezra Benusは「彼の活動は、彼のアイデンティティであり、世界で自身を導くツールである、ユダヤ人であること・クィアであること・病気を患っていることに基づいたものである」、と述べている。(彼によると)彼の作品は、慢性疾患

を持つ自身の日々の生活と、医学的問題による特徴づけ・自身のアイデンティティ・障がいの社会的現実に関連したものである。彼の様々なアートの形の作品は、規範的であることと生産性の価値に関する時間の構造に疑問を投げかけるものである。活動では、障がいを持つ当事者としての概念が社会的状況とどう衝突し、優生学の歴史・負の遺産から現代の健常者優先主義の存在までを関連付け・強調し、病気とケアを包含する政治を検証したこともあるという。

4. 今後の展望



(Carolyn Lazardの2021年制作された画面がチカチカする映画作品”Red”(赤色))[Nothing About Us Without Us: Disability Arts Now](#)

各記事は今後も継続的な障がい者の正義運動(利用可能性のための運動)が必要であり続けることを強調しながら同時に、アート界の健常者が態度・考え方を変える必要性を強調していた

- 障がいを持つアーティストは、彼らの仲間が作品を見れるようにするため、美術館の利用可能性に対する最も熱心で重要な提唱者であり続けている。2019年、Lazard・Herman・他の障がいを持つ人びとは”あなたとどこでも共にいたい”という集団を結成し、障がいを持つ人びとによる障がいを持つ人びとのためのパフォーマンスや集会を開き、常にASL通訳者・絵画の文章での描写・スロープ等、様々な形式の利用可能性について検討しており、同集団が単につながりの手段ではないと、Hermanは説明した。例えば、Hermanの2023年のパフォーマンス作品“LAX”では、制限された動きと全力を使った動きを繰り返し、力を失ったような動きという彼の身体の動きと、そ

これらの動きの音声描写が行われ、アートの体験可能性自体が原材料・アート形式となっていることが示されていた。

- (障がいを持つアーティスト対象の滞在型プログラムBRIClabの参加者の作品を展示した展示会に訪れた健常者の執筆者は、展示会にテーマ設定がないため統一感を感じられなかったとしながらも、)「障がいという枠組みでグループ化されたアーティストは、余りに健常者優先主義(で男性的・白人、等々)な展示プログラムに挑む1人2人のアーティストを助ける形式主義に対する批判を回避しようと試みる機関が存在する状況に対する必要で明らかな是正を提示していた。だが、私たちはBRICのような空間に、障がいを示すことの負担を背負わせることはできない。私はそれらのアーティストがアート界の広範に散らばり・広がっていき、彼らの作品が必ずしも障がいをテーマにしなくてもいいようになることを見たい」、という望みを示していた。
- (執筆者によると)アーティストにとって繰り返し明示的または暗示的に障がい者の正義を訴えることが苛立ちを覚えさせるものであれば、彼らが人びとに自身の存在に意識を向ける必要があり、彼らが素晴らしいことを成し遂げる能力を持つことを思い出させなければならないことは、極めて士気を削ぐものである。だが、それらが暗示的に人びとに思い出させる力は今も強力であり続けており、変化の兆候もみられる: 例えば、2022年の各世代毎の主要アーティストたちの中に最低でも1人は障がいを持つアーティストが含まれていた。しかし、それらの包摂の中には形式的であったり、的外れであったものもみられた[...]アート界において、健常者優先主義と利用/体験/活動可能性の欠如が驚くべきものとみなされたことは1度もないが、望ましくない事例の批判より、障がいを持つアーティスト皆が作品の中で行っている行為の大多数が健常者優先主義的な解釈を批判するのではなく新たな解釈を創り出していることに対する称賛に注力すべきではないだろうか。2022年までで[...]速度は遅いものの、確実な利用/体験/活動可能性の向上が認められている。直近の世界規模でのあらゆる利用/体験/活動可能性に向けた取り組みの集まりは、規模はこれまでに大きく変わったが、その多くの目的が不明確で不適切であった。(執筆者は)「それらの不適切な配慮がされた国際的展示会は、障がい者アート(の展示)は必須であり、利用/鑑賞可能性は対応すべき問題であることの認識を示してはいる: [...]それらのアート作品や障がいを持つ人への配慮が、この規模で考慮されている。同時に、それらへの転換が障がいを持つ人びとの集団との話し合いから取り決められたものでないことも明らかである。上記で言及した知識と創造力はあるながらも、どこか障がいを持つ人は未だ頻りに憐れみの対象とされている。多くの人が自身が共有していない経験やアイデンティティの代理として発言・意思決定することは有害であり得ると考える一方、障がいを持つ人は依然、時に彼らの味方になろうとする人びとから、自身で意思決定ができないと誤って解釈されている。私は何十年にもわたる文言を繰り返す: 私たちなしで私たちに関係することはない。私たちの活動は継続中であり、なされるべきことが山程ある」、と主張した。

障がいを持つアーティストが、障がいをテーマにする/しないを自由に選択して(つまり障がい者の正義運動等の運動とは無関係な、自由な意図/嗜好によって)アート作品を作ることができる/できているのだろうか

5. 参照記事一覧



[United States Artists was created in 2006 to support artists and their essential role in society.](#)

- [What Disability Art Means Now](#)
- [Artists With Disabilities Show Us How We've Failed](#)
- [Nothing About Us Without Us: Disability Arts Now](#)
- [United States Artists was created in 2006 to support artists and their essential role in society.](#)
- [Ezra Benus](#)
- [Frist Art Museum Presents Exhibition of Paintings, Photography, and More by Artists with Disabilities](#)
- [The US right is coming for disabled people. Here's why that threatens everyone](#)

6. アーティスト紹介

- [John Bramblitt](#)
- [Saleem Hue Penny](#)
- [Nancy Rourke](#)
- [Shannon Finnegan](#)
- Carolyn Lazard

